

# 書評

「母村と離村者のゆくえ」

日本の農業、あすへの歩み（一四九号）

高橋直栄 著

農政調査委員会

昭和五八年九月三〇日発行

領価 九〇〇円

長崎 明

「母村と離村者のゆくえ」と題するこの冊子は、第一部「課題へのアプローチ（高橋直栄氏のレポート）一〇〇ページ」と第二部「コメント（数名による座談会記録）三四ページ」の二部から構成されている。座談会の参加者は、報告者の高橋氏を含め、島崎稔、江口英一、西山文四郎、臼井晋、吉田俊幸及び司会者の井下喜一郎の諸氏で、高橋レポートを高く評価しながらも、そこに潜む問題点をも鋭くえぐり出そうとしている。

個人的なことであるが、高橋直栄氏は、私がお会長の仰せつかつている新潟県農村問題懇話会の会員であり、また、対象地の松之山町には私自身も昭和三四年以来しばしば訪れているので、このレポートは私にとって「ふるさと」にも似た懐かしさと親しさをおぼえる。

しかし、私は、それにもまして、ここで採られている論理の進め方に注目したい。すなわち、報告者も述べるように、このレポートは、まず「松之山を捨てて都市へと出て行った離村者のありのままの姿」をしつこいまでに追跡することから始まり、それらの具体的な事例の中から、より普遍的・客観的な過疎深化のメカニズムを明らかにしようと試みる。同氏は、挙家離村者を供給する「ムラ」側に内在する必然性及び彼らをして「マチ」生活者として存在せしめる因果性を導き出すことよって、過疎深化の悪循環のメカニズムは現在なお不変であり、一般的に指摘されるような「過疎に歯止めがかかったとする論」にはくみしえない実態にあることを強調している。

同氏の表現を借りれば、「いわゆる過疎の社会病理学的表情はまだ初発の段階といえなくもない」のであり、したがって、「その歯止めの指摘は農山村の復権と地域社会の回復、政治経済的な自治と自立の水準に求められなければならない」のであり、「自主的経済循環の量的質的回復の展望とその水準にこそ、過疎化の歯止めの指標を求めなければならない

い」とする結びの言葉に、私も強い感銘を受けるのである。

第二部のコメント（座談会）もなかなか読みごたえがある。司会者の井上氏が「私も実はこのレポートを讀むまでは、過疎問題というのはいぶかおさまっているのではないかという意識に毒されていたのだが、現地で実際に暮らしながら足でまとめられたレポートで、そういう常識を一気に覆されるような感じを受けた」と述懐するくだりは、恐らくは、このレポートの全読者に共通する感慨であろう。

それにしても、挙家離村者の追跡を手掛けたから二〇余年にしてこのレポートをまとめた高橋氏の執念に驚嘆せざるをえない。この精神力はムラの人びと（ムラに残された弱者）への愛情に裏打ちされているからこそ持続しえたのであろう。「地域に根ざす」とはどういうことかを教えられた思いがする。

座談会は、こんな感慨を含みつつも、時には冷酷さを感じる程に、高橋レポートにいう「過疎深化のメカニズム」を粗上に乗せ、その論理の発展してゆく先を見通そうとして、真摯なディスカッションを繰り広げている。高橋報告の延長線上に立って、「松之山再生の手がかり」を問われて、当の高橋氏自身「そこが一番つらいところなので……」と、つい本音を吐露するあたり、座談会ならではのリアルティがにじみ出ている、同氏を知っているだけに、ほほえましくさえ思われる。

高橋氏以外の、「横から見ている立場」の参加者が、「何か地域資源を生かすことによる再生の道」を求めようとするのに対して、地元事情を知り過ぎて居るが故に、却って積極的な提言の出しにくい高橋氏のとまどいを感じられる。座談会が終わる頃になって、結局のところ、「一度しゅんとしてしまったのを勇気づけるには、投資効果がないようでも、誘発剤としては国・県の投資がとて有効だろう。そうすれば、その人たちが課題に向かつて解決の手だての工夫をしていく。そういう力がついてくれば、そういう人たちのなかで自立的に解決する方策というのが展望としてかなり出てくるだろうと思う」という高橋氏の発言が結びの形になっている。

それに対して、白井氏の「法律と教育が変わらなければだめだ」との指摘も、その通りには違いないが、現実問題の解決という点ではやはり第三者的見解ということになろう。現実を克明に見つめることと、客観的に解析し、将来のあり方を見出すこととの間には、かなりの隔りがあるのを感じないわけにいかない。

全体を読み通してみても何か歯がゆさ、もどかしさが残るのは、それだけ現実がきびしいということでもあろう。私なりに、あえて一視座を述べるとすれば、それは、この冊子全体を通じて、過疎地における教育問題が欠落しているためかも知れない。すなわち、安塚高校松之山分校教諭としての高橋先生の立場

で、こうした地域での教育の位置づけにも論及してほしかった。

「ヤクソモン（社会的弱者）だけがムラに残る」という現状を脱却する道の一つとして、教育の果たす役割もまた大きいのではないか。隣接する長野県では、県内で教育を受けた者が積極的に他出し、同郷人を呼び寄せるといふ発展的循環の道を求めている。私には、信濃教育の根底には過疎からの脱却願望が秘められているように思われる。もし機会を得たら、高橋先生にその辺りのお話をお聞きしたい。

（新潟大学 農学部）

#### 高校教育実践シリーズ 十一

「働き学ぶ生徒と教師

首藤隆司 著

明治図書 刊

宮本 敏

「わたしは定時制のほうが好きです。」これは著者が採用面接の時に発した校長への言葉である。私自身も定時制で働いた経験はあるが、果してそう言えるものを身につけたであろうか。この本を読むと、全体として、定時制を、「人生をりっぱに生きぬく、ほんとうの学力をつけられる学校」として位置づけ、

そこで働くことが、「全日制一流校を含め、国民教育としての後期中等教育全体に役立つ」ものになるという、著者の信念が貫ぬかれてあるものを感じる。

とかく世間では教師のことを「親方日の丸」と批判するむきもある。しかし、それだけに「手をかけられるだけかけて、すばらしい仕事をする」、定時制の職人としての教育が可能なのだと著者は主張している。全く、この本の中にはそうした手間ひま言わずに作りあげた生徒についての記録がある。

若い新任の教師は、現在、中学・高校ともに生徒をどう指導するかで大変悩みを沢山もっているようである。とかく自らの自己解放と生徒の指導が同一時期に来るので、そういう先生は生徒に人気はあるが、なんとなく学力が伸びず、規律がない生徒になってしまうという悩みは深刻であろう。首藤さんにしてからが、若い頃はそうであったと知って安心すかも知れない。先生は、時代的にも、戦後の「自由解放時代」に教育を受けたために、「自由分散主義」的解放をはじめは目指したと書いていられる。そこでの諸々の失敗から、次第に、マカレンコに学びながら、集団としての規律へと開眼してゆく。そうした経過をよく記述されている。しかし、一方、規律々々言って管理主義的になりがちである現在の傾向への強い反証をこの本は示していると思う。

私自身が現在、実業高校に勤め、かなり強